

献 辞

経営学部長 中 山 勝 己

私たちは高澤貞三先生のご退職を記念し、また、先生の本学における永年のご功績、ご貢献に敬意と謝意を表すため、松山大学論集「高澤貞三教授記念号」を編纂いたしました。

私が松山商科大学に赴任してきた昭和49年の4月、学生を対象とした新学期のオリエンテーションが行われている時期でありました。高澤先生からお声かけをいただき、前年度まで非常勤講師として「広告論」を担当されていた愛媛新聞社の松下功常務取締役（当時）にお目通り願う機会を得ることができました。「君もこれからこの大学で広告論を担当してゆくにあたって、松下常務には何かとお世話にならなければならないことがあるでしょうから、私が常務を紹介させていただきます」といって、私をわざわざ愛媛新聞社まで連れていってくださいました。この日は春うららかなる晴天の一日でした。「私はきょうは特別の用事はすませてきていますので、市内を少し案内して差し上げましょう」。そういって先生は歩き出されました。新緑の堀の内から買い物客で賑わう大街道限界まで、ゆっくりと散歩を楽しみながら、途中、昨今の大学の様子などもお教えいただきながら、私は思い出に残る、この上なく素晴らしい一日を過ごさせていただきました。

私はこれまで教員としての在り方について先生にいろいろとお教えをいただきました。先生はゼミのコンパは3、4年生合同で開いていらっしゃいました。当時の高澤ゼミ幹事から連絡があり、私は先生のゼミのコンパにご招待していただくことになりました。その日は青木先生もお見えになっていらっしゃいました。「いろいろな教員と話をする機会を学生に与えてやりたい」。先生はいつもそうお考えになっていらっしゃいました。ゼミ生は高澤先生を囲み、そして

青木先生を囲み、ゼミの先輩を後輩が囲み、議論に熱中していました。

高澤先生のゼミでは、発表用のレジメは全て「ガリ」というのがルールとなっていました。一字一字丁寧に「鉄筆」で文字を刻んでゆく。1枚の原稿を完成させるまでに学生は相当の時間を投入しなければなりません。一字刻んでは全体を読み返し、また一字刻んでは全体を読み返してみる。この作業を繰り返してゆくうちに、自分が準備しようとしているレジメの全体構想が自然と全て頭の中に収まってゆきます。コピー機なるものが学園に普及するようになってからも、高澤ゼミの学生諸君は「ガリ」を使っていました。ゼミ生諸君は教務課に備えてあった「謄写版」がなくなった後は、これも、もうすでに誰一人として使う人のいなくなった加藤会館の学友会総務委員会の「謄写版」で作業を進めていました。高澤先生のゼミが午後8時、9時を過ぎることは至極普通のことでした。長時間におよぶゼミでの議論の最中、椅子に座った学生の姿勢が崩れることはありませんでした。経営学部で最も厳しいゼミの1つ。「厳しいゼミ」を承知の上で、多くの学生が先生を慕い、集まり、巣立ってゆきました。先生と共に最も多くの時間を過ごすことができたゼミの学生、それは高澤ゼミの学生でありました。先生がこれまで推し進めてこられたゼミナールにおける教育の根本理念をよく理解する教員の間から、ゼミナール「相撲部屋」コンセプトなるものが云々されるようになります。ゼミの「師匠」を慕って多くの「弟子」が入門を果たし、師匠のもとで研鑽を積み、社会という土俵で活躍するため巣立って行きました。高澤先生のご薫陶を受けたゼミ生は34期300名を越えます。

先生は本学における学生スポーツの発展のためにも大いに力を尽くされました。「剣道部」は戦前より、中四国では追随する敵はなく、常に全国の強豪校から目標にされました。戦後は一時期、学校における武道一切の実施が禁止されましたが、昭和28年7月7日の「学校における剣道の実施について」の文部省事務次官通知により、学校で再び剣道を実施することが認められるようになります。高澤先生が「剣道部」の部長に就任されるようになるのが松山商科大学

に赴任されて6年目の昭和42年。それから10年後、昭和52年6月に開催された第25回全国日本学生剣道選手権大会において大城戸功選手が優勝し、剣道部は全国から再び注目されるようになります。この年は世界柔道選手権大会派遣選手選考会において浜田初幸選手が60kg級で第2位という快挙を成し遂げた年でもありました。剣道部は爾来、ますます発展を遂げ、女子剣道の分野におきましても優れた剣士を輩出することになります。高澤先生は平成9年に完成した本学の武道館『彰廉館』の名付け親でいらっしゃいます。

一橋大学時代にグラウンドホッケーのご経験のおありになる先生が松山南高等学校のグラウンドホッケー部で活躍した学生に働きかけておつくりになった運動サークルが「ホッケー同好会」であります。昭和56年に女子を中心として発足した同好会は、これまでの活躍が認められ、今年「部」に昇格しました。

高澤先生は一橋大学大学院商学研究科修士課程を卒業され、一時愛知学院大学に籍を置かれていましたが、昭和36年4月1日付けで松山商科大学商経学部講師として赴任されます。この年6月、二学部設置準備委員会が設置され、同9月、経済学部、経営学部設置申請が行われます。そして翌年昭和37年1月に経済学部、経営学部設置認可が下され、松山商科大学は4月より、これまでの商経学部一学部の単科大学から経済学部、経営学部の二学部制の複合大学として新発足することになります。先生は昭和39年4月助教授、昭和46年4月には教授にご昇格。昭和55年4月から昭和59年3月まで2期4年間にわたって経営学部長、平成2年4月から平成4年3月までの2年間は経営学研究科科長の要職を歴任されております。この間、昭和59年1月から平成元年12月までの2期4年間にわたり、学校法人理事に就任され、昭和63年2月からは松山商科大学法学部設置委員会委員長として、法学部設置に向けて並々ならぬ力を尽くされることになります。高澤先生は「法学部は文科系総合大学必須の学部であります。松山商科大学が総合大学として更なる発展を遂げるためには、全学挙げて法学部の設置に力を投入する必要があります」というお考えを常日頃お持ちになっていらっしゃいました。

高澤先生のご専門は「経営学」で、本学ご赴任当初は「生産管理」、「原書講読」を担当され、昭和39年からは「一般経営史」を中心として「経営管理総論」、「経営学総論」、「経営学原理」と、経営学部の核ともいえるべき重要な授業科目を担当されます。

先生は大教室で講義をされる際もマイクをお使いになったことはありませんでした。教師はすべてのエネルギーを学生にぶつけて講義を行うもの。マイクの力が必要となった時には、教師はおしまいであるというお考えをお持ちになっていました。先生の大きなお身体から発せられるお声は、大教室のすみずみにまで響きわたってゆきました。

先生のご研究の足跡は「高澤貞三先生還暦記念の会」によって発行された『経営史論集』を通じて知ることができます。この論集は合計7つの章、ならびに、附録その1、附録その2より構成されています。先生は第1章『経営史学の研究に関する一考察——特に経営学体系との関連において』で、先生ご自身の経営史研究の立場を明らかにされています。「制度・風土・思想を通じて」という副題の付けられた第2章『経営史研究のための序章』においては、経営史研究における学際的なアプローチの必要性が示唆されています。営利についての思想史を経営思想史研究の一つの領域としてとらえてみるということが示唆されている論文が第3章『経営思想史に関する一考察——「営利と所有」の性質を中心に』であります。第4章『個別企業史に関する一考察——経営学的経営史と個別企業史の関連』は、経営学的経営史の立場から個別企業史をとらえようとしたものです。第5章『電気事業経営の生成と発展』においては、わが国、特に四国における電灯諸会社の生成の過程を、法制の面、企業家・出資者の資本形成の面、発展する電気技術の面、企業形態の面、企業管理組織の面、電気事業の市場形成の面、電気事業経営の財務の面などに焦点を当てて分析するとともに、電気事業の国家管理の時代を経て、戦後、より近代的な電力会社が誕生するようになるまでの過程が詳述されています。第6章『企業者史研究に関する一考察——企業者、経営構想力、営利の性質、関連をめぐって』

は A. H. コールの企業者規定と大河内暁男の経営構想力に関する考え方を紹介しながら、先生の営利論がどう結び付き、関連をもつかということが明らかにされています。第7章『経営史と企業者に関する一考察——渋澤栄一思想と行動を中心に』は、特別な人物を経営史研究の対象として取り上げることにについては限度と陥穽があることを十分に認めつつ、経営史研究においてある特定の企業者を取り上げて研究することの意義について言及されております。こうした代表的なご業績からも分かりますように、先生のご研究の守備範囲は経営史研究のアプローチの方法に関する研究に始まり、経営学的経営史研究の一環としての個別企業史の研究ならびにそこでの電気事業経営の生成と発展をテーマとした研究、経営思想史に関する研究、企業者史に関する研究等にまで及び、その研究においては、ときによっては経済学的視点が、またときによっては社会思想史的視点や宗教史的視点、文化史的視点、さらには風土論的視点等々、学際的な視点が貫かれています。

幅広い知識に裏付けられた先生の講義に魅了され、学者としての道を志すようになった学生、人を愛し、教育に熱情を注がれる先生のお姿に接し、教師の道を目指すことを心に決めた学生、先生の企業者論、経営者論に影響を受け、ビジネスの世界へ飛び立っていった学生、先生の国家論、人間論に感銘を受け、政治家の道を夢見るようになった学生。学生たちは皆、それぞれの道へ進み、さらに飛躍を続けております。先生の愛された学生たちに代わりまして、ここに厚く御礼申し上げます。

高澤先生、38年間本当に有り難うございました。散歩が大変お好きで、小径のある風景をこよなく愛される高澤先生。私たちはこれから先もいつも、先生にお目にかかれることを楽しみにしております。先生の今後のますますのご健勝、ご活躍をお祈りしつつ、ここにこの論文集を慎んで献呈いたします。